

第2回「宇宙(天文)を学べる大学」合同進学説明会」 —広報のあり方

福江 純¹・有本 淳一²・河野 明里³・定金 晃三¹
成田 直⁴・西村 昌能⁵・松本 桂¹・米原 悦子⁶
渡部 義弥⁷

〈¹大阪教育大学 〒582-8582 柏原市旭ヶ丘 4-698-1〉

e-mail: fukue@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

〈²京都市立塔南高校〉〈³貝塚市立西小学校〉〈⁴豊能町立吉川小学校〉

〈⁵京都府立洛東高校〉〈⁶島本町立第一小学校〉〈⁷大阪市立科学館〉

昨年に関山と大阪で開催された“宇宙(天文)を学べる大学”合同進学説明会は、今年は熊本と仙台でも開催され、全国に広がりを見せている。大阪で開催した第2回説明会は、総括的には、質はアップしたものの量はダウンした。反省点は、やはり広報のあり方かと思われる。郵便などによる高校と大学への周知、一般(親向け)への周知、各参加大学や会場科学館などのHPへの掲載、天文関連雑誌や地方紙への掲載など、多面的なアナウンスが必要である。高校現場への強力な宣伝による認知と定着も必要そうだ。また、このような催しの適正規模は、参加大学数が15程度、参加学生数が50から7,80くらいだと考えられる。今年も参加者の満足度は高く、より最適化された開催が求められる。

1. プレ・プレッシャー

昨年はハイパーノバ的に1カ月半ほどの準備期間で実施した説明会だが、今年は3月末に会場と開催日も決まり、開催日へ向けてゆるゆると準備が進んだ。昨年の段取りをベースにして、押さえるべきところは押さえつつも、とことん省力化したので、トータルの“人時”^{*1}は昨年の1/10ぐらいしかかからなかったと思う。

実際、開催日の前日までは何とかなるだろうと思っていたが、さすがに開催日当日(2009年6月14日)は臨戦態勢で目が覚めた。なぜだか昨年よりプレッシャーで胃が痛い。はりきって9時過ぎには科学館に着いてしまったが、ほぼ同じころ、

阪大のグループも到着して気合いが入っている。まゝ、「超司会者」の腕章も作ったし、もう思い残すことはないかな、後は天命を待つだけ状態である。というか、すでに夜の反省会が待ち遠しい。

第1回開催の顛末については、詳しい報告をしたので¹⁾、今年とはとくに報告するつもりはなかった。しかし、開催してみると、やはり反省点も多々あったので、とくに広報に関する問題を中心に報告したい。今年も九州地区と東北地区でも実施されたし、前回の報告と合わせて、今後の実施の参考としていただければ幸いである。

2. デイ・ビフォー

事前の準備は、昨年の経験を活かしながら、手

^{*1} 人数×時間 (man-hour)

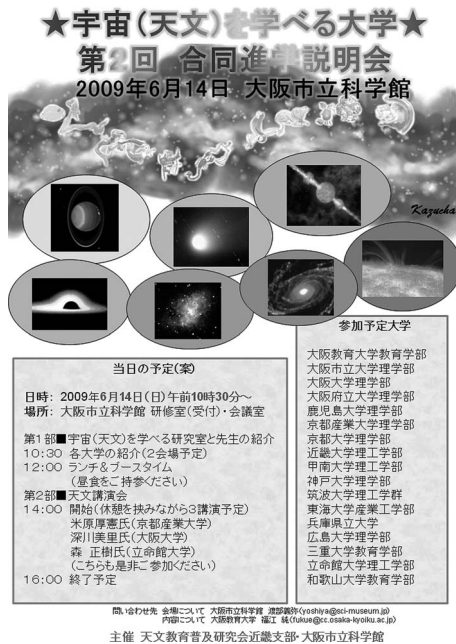


図1 合同進学説明会用に作成したポスター。昨年は修正に続く修正でバージョン9まで行ったが、今年はバージョン5まで。

を抜くところは手抜きしつつ、昨年以上には念入りに行なったつもりである(図1)。

■世話人関係

初回も今回もそうだが、事前には世話人同士が顔を合わせる打ち合わせはしていない。大学関係の取りまとめ役と会場関係の取りまとめ役が準備全体に目配りをしながら世話人間に作業分担していけば、無駄な打ち合わせ時間や不要なメールを省略できる。ただし、事前の作業としては、案内文書など郵便物の発送などもあり、複数のスタッフが居る大学でないと負担はかなり大きくなると思われる。またもちろん、開催日当日は、受付やビデオ撮りや会場係そして司会進行など、10人弱のスタッフ(世話人)は必要である。

■会場関係

今年も昨年と同じく大阪市立科学館で実施した。また実施については、早くから打ち合わせを始めて、天文教育普及研究会近畿支部と科学館の共催という形で実施できた。開催場所として、

地の利のよいニュートラルな会場は重要なポイントだと思う。

■大学関係

昨年の参加大学には3月末にファーストアナウンスを行い“予約”を取った後、5月18日に関係団体へポストして、最終的に、大阪教育大学教育学部、大阪市立大学理学部、大阪大学理学部、大阪府立大学理学部、鹿児島大学理学部、京都産業大学理学部、京都大学理学部、近畿大学理工学部、甲南大学理工学部、神戸大学理学部、筑波大学理工学群、東海大学熊本キャンパス、広島大学理学部、三重大学教育学部、立命館大学理工学部、和歌山大学教育学部の16大学が直接参加、兵庫県立大学がポスター参加していただくことになった。今回も遠方からの参加大学があり、参加者にとっては非常に幅広い情報が得られただろう。

■講演関係

初回同様に、3講演を実施した。講演内容については、科学館的な観点から、高校生はもちろん一般の人にも興味をもってもらえるような内容でお願いした。

■基礎広報

基礎的な広報として、高校への宣伝は昨年以上に手広く行った。具体的には、A4に印刷した挨拶状やカラーポスターなど4枚を、

- 1) 昨年の説明会に参加した高校教員全員(13通)
- 2) 兵庫、大阪、和歌山、京都、奈良のSSH(Super Science High School)高校(22校)
- 3) 大阪府立高校で進学優先校に最近指定された高校(10校、ただし2)と重複あり)
- 4) 大阪教育大学の卒業生が在職する高校(5校)
- 5) 昨年大阪教育大学で実施した「ひらめき☆ときめき事業」に生徒が参加した高校(4校)
- 6) 大阪教育大学附属高校で行った教育研究会に参加した高校理科教員(7校)

7) 大阪教育大学附属高校(3校舎)に発送した。重複を除いて54カ所である。

ここで重要な点は、高校長宛ではなく、発送の宛先を理科担当教員か進路担当教員宛にすることだ。またカラーポスター(図1)を同封すると、掲示してもらえたときに目立つはずである。

受付で記入してもらった高校数は13校なので、4分の1弱からの参加はあったことになる。

反省点は、発送先として公立が中心で私立がほとんど入っていない点だ。また後でも述べるが、高校以外に大学と一般への広報も重要である。

昨年の反省を踏まえてマスコミ関係にもアナウンスしたが、ここはまだ不十分だったと思われる。

3. ザ・デイ

雨天の昨年に比べ今年はいい天気だが、中之島護岸を歩きながら、何となく悪い予感がする。というのも、晴れた日には科学館の入りは少ないというジンクスがあるのだ。

事前準備では受付などの割り振りは端折ったので、それらをバタバタ手配しているうちに、あっという間に受付開始の10時になった。やはり、どうも出足が鈍く、受付開始時の段階で、半分くらいになりそうな予想である(図2)。

3.1 大学紹介タイム

今回は参加大学が増えたこと、去年は発表時間が6分しか取れなかったことから、いろいろ検討した結果、大学紹介タイムは2会場並行に発表時間10分で実施した(図3)。

しかし、受付の後でいきなりどちらの会場に行くか迷っている参加者がいた。大学はアイウエオ順で機械的に2会場に割ったが、たまたま聞きたかった大学がほぼ同じ時間になったようだ。実施したアンケートでも、短くても全大学が聞けるほうがいい、と答えた人が多数だった。

これらをみると、やはり、各大学の発表時間を短くしても1会場で実施し、詳しいことをブース



図2 午前10時過ぎの受付風景。



図3 大学紹介タイムの会場風景。研修室(上)と会議室(下)の2会場で並行実施した。

タイムで説明する方式がいいと思われる。

発表については、2会場ともビデオ撮りしWEBに搭載することもプログラムには書いておいたが、やはり現場で聞くほうが臨場感はあるだ

ろう。

さて、肝心の参加者の数であるが、進学説明会への参加者は、全体で30人ぐらい(うち高校生らが22人)で、昨年の2/3程度にとどまった。数的には、ピンポイントでの依頼を昨年ほど何回もしなかった分が、今年はそのまま10弱ほど減った勘定だ。一方、高校への広報は昨年より手広く行ったので、世話人側としては昨年よりは増えるだろうと高をくくっていた感が否めない。やはり多方面にわたる多面的な広報が必要だと思う。

一方、各大学の発表者のプレゼンはますます磨きがかかって(笑)、10分という適当な長さで十二分に話されていた。内容的にはどこもとてもよかったと思う。ただし大学単位でそろえてもらったので、京大のように、航空宇宙やマイクロ波工学などまで含め数十もの関連研究室がある大学は、窮屈な発表で申し訳なかった。

今回も休憩時間などにいろいろインタビューしたが、その中から、まず一つ。

★インタビュー 大学生らしき参加者へ

“どちらからですか”“同志社(工学部)からきました”“どういう目的で”“宇宙教育に興味がありました”“どこで情報を聞きましたか”“科学館(のサイト)で”。

昨年も数名の大学生の参加があったのだが、宇宙(天文)が学べる大学“院”の情報を欲しい学生もいる。参加者を高校生に限定したわけではないが、想定参加者の対象はできるだけ広く取って、高校関係だけでなく大学関係へのアナウンスも十分に行うことが重要だろう。

3.2 ブース見学タイム

初回と同様に、ランチ&ブース見学タイムはたっぷり2時間とった。また今回は、3部屋を確保し、大学紹介の会場(2部屋)とは別の広い部屋



図4 ブース見学タイムの会場風景(多目的室)。各ブースでは丁寧な説明を受けられたようだ。

をブース会場にしたので、会場設営が非常にスムーズに行えた(図4)。

参加者の人数が少なかつたためもあるが、参加者にとっては、ブースタイムで丁寧な説明を十分に聞くことができ満足度は高かつたようだ。一方、回転が遅いというコメントもあつたので、もう一工夫必要かもしれない。

また各ブースを回ってパンフレット類を集めている一般の方がおられた。理由を尋ねてみると、地方にいる姪御さん? だったかが、宇宙を希望しているそうで、こんなにたくさんの大学の資料が一度に集められる機会があつたと喜んでおられた。“将を射んとせばまず馬を射よ”，ということで、家族や進学指導をする人も含め広く呼び集める方法を考えるべきだろう。

3.3 講演会パート

今回の講演は、一般向けも意識しつつ、少し短め(30分)の講演を、米原厚憲氏(京都産業大学)「海外武者修行で得たもの」、深川美里氏(大阪大学)「女性研究者への道+原始惑星系の面白さ」、森 正樹氏(立命館大学)「いろいろな宇宙の見方」のお三方をお願いした(図5)。

講演も多方面にわたる内容で、どれも充実した講演をしていただいた。みなさん、丁寧に熱心に



図5 研修室における講演風景。

講演していただき、聞く側にもその迫力がよく伝わってきてよかったと思う。深川さんが研究者になるまでの話を、女子生徒が熱心に聞いていたのも印象的だった。

講演会への参加者は、高校生らが10人程度と、科学館の友の会の会員が15人程度、そして当日の科学館入館者(1,500人)から10人弱ぐらいである。フリのお客さん*2にもっと入ってもらうために、科学館における事前の広報や看板の設置など、まだ工夫すべき反省点が残された。

科学館サイドにすれば、わざわざ講演会を企画すれば謝礼を払わなければならないところ、大学の“えらい”先生がロハ*3で講演してくれるのだから、これは“美味しい”話なのだ。講演会パートについては、高校生などの参加者への付加価値をつけるとともに、科学館など開催場所にとっても大きなメリットになる。あちこちの大学の先生が集まる機会は、もっと有効に活かさないといけない。

★インタビュー 休憩時間に親子連れに対して

“どちらから来られましたか”“滋賀県の**高校”“今回の企画はどこで知られましたか”“京都

産業大学のホームページをみてて、知りました”…“大学紹介はどんな感じでしたか、たとえば2会場でしたが…”“…全部聞きたいです。聞きたいところが別々だったので”“ブースはいくつぐらい回られましたか”“3校です”

全くアナウンスをしていない滋賀県からこられた親子連れがいて、情報源を尋ねたら、上記のように京都産業大学のHPで知ったとのことだった。また、受付の学校名やインタビューして聞いた結果から、参加者の内訳は、

- ピンポイントの依頼 3~4人
- 高校などへのアナウンス 14人ぐらい
- 大学HP 4~5人ぐらい

のような感じだった。

それほどの手間ではないと思うので、各参加大学のホームページでも宣伝してもらおうとよい。

4. デイ・アフター

第2回目の説明会は、全般的に評価して、質的にはたいへんに向上して面白いものだったと思う。実際、参加者のアンケートを眺めても、満足度はかなり高い感じだった。

しかしまた、スタッフ数より参加者数が少ないイベントは失敗であり、その意味では、イベントとしては成功したとは言えない。次回はこれを踏まえて、目的が達成される最適な方法を考えないといけない。

と、ごく自然に“次回”と書いたが、実は開催翌日に参加大学への報告をしている間に、来年の同時期に大阪市立科学館で第3回目を開催することが決まってしまった。というのも、開催準備の時期は早いほうがよく、具体的には、科学館における来年度の事業計画に盛り込んでおいたほうが良いとの判断からである。

*2 偶然居合わせたお客さん。

*3 タダ(只)をカナに開いたもので、タダの意味。

また企画のタイトルについても、現在のものは長すぎるし（広報誌などに入り切らなくて嫌われる）、またあまりにストレート過ぎる（対象が限定され過ぎる）。したがって、来年は“改名”して第3回ということになるかもしれない。

さて、大阪での開催の2週間後（2009年6月28日）に、東北地区で同様の説明会が開かれた。大阪教育大学は当初はポスター展示だけのつもりだったが、今回の大阪開催の反省を踏まえ、他地区での開催状況を調査するため、また大学自体の宣伝も対面で行うため、（福江が）「超代表」として、急遽、東北に走った。

仙台の開催会場（仙台市天文台）は交通の便も悪く、また大都市圏に比べて人口密度が低いので、参加人数が心配だったが、10大学ほどの参加大学に対し、40人ほどの高校生が参加して、よく集まったと思う。それほど近いとはいえない岩手からの参加者も何人かあった。大都市圏よりも、むしろ、情報への希求度は高いのかもしれない。また、参加高校生の半数ぐらいにインタビューして尋ねたところ、大部分は高校の先生から情報を得ていた。九州や関西での開催状況を受けて、高校現場向けへの直前までの積極的なアナウンスが効いたと思われる。

以上を鑑みて、最後に、広報のあり方について、簡単にまとめておくと、

- ・基礎広報は地道に行って、時期と場所も固定し、高校現場などへの“認知”と“定着”を図る。
- ・高校の先生にはしつこいほど宣伝する。
- ・全国紙はもちろんだが、各所の世話人を中心に、地方紙などへの積極的な宣伝を行う。
- ・天文関係雑誌で開催期日などをアナウンスしてもらう。
- ・アストロアーツのHPなどで告知してもらう。
- ・参加大学や会場（科学館など）でもHPなどで積極的にアナウンスする。

あたりになるだろう。

このような合同進学説明会は、ある種の“お見合いパーティ”みたいなものだから、出逢いの数は、参加大学の数と参加学生の数の積に比例して効率がよくなる。去年と今年の開催状況を見ると、参加大学数が少ないと情報量が減って有効価値が下がり、参加大学数が20を超えると発表時間の配分が困難になるだろう。また参加学生数が10程度ではさすがにコストパフォーマンスが悪いし大学側のモチベーションも下がるが、70や80を超えると会場設営や対面の相談が難しくなりそうだ。したがって、実施上の適正規模としては、

参加大学数 15大学程度

参加学生数 50人から7,80人ぐらい
ぐらいが適当ではないかと思う。

もとよりこのような説明会で志願者が何十人も増えると思っている人はいないだろう（いや、実際、そんなに増えても受け入れられない）。優秀で熱意ある高校生や大学生に、広く、宇宙や天文が学べる研究室の情報を紹介できればいいのだと思う。したがって、地域限定はせずに、物理的な限界まで大学も多いに越したことはない。

去年と今年と、参加した高校生たちに直接インタビューして聞いた感触では、参加した高校生たちには非常に有用な情報になっている。そういう声を聞けるだけでも開催する価値はあるが、できれば、より多くの熱意ある高校生に参加して欲しいものだ。そのためには、やはり徹底的な広報活動が必要である。また全国各地での開催も検討して行って欲しいところである。

来年も今年以上に楽しく実施したいと決意を新たにしつつ、筆を置きたい。

参考文献

- 1) 福江 純ほか, 2009, 天文月報 102, 48